

発掘調査成果展 埋もれていた太宰府の歴史 5

弥生時代の人々のつながり

1 生活の中でのつながり

弥生時代は、日本に稲作農耕が定着した時代としてよく知られています。

日本に伝わった稲作は、大陸から伝わったものと考えられ、その当初から灌漑技術（田んぼに水をひく技術）や各種農具などを備えたものであったことが、調査から明らかになっています。

稲作は、それまでの自然まかせの狩猟採集による食糧獲得作業に比べて、安定したものであった反面、日々の農作業を必要としました。現代の農作業には、整地作業→施肥作業→種まき→移植・間引き作業→除草作業→収穫作業→運搬作業→乾燥作業→脱穀作業がありますが、当時も同じような作業をしていたことが想定されます。また実際の農作業にあわせて、田んぼに水を引くための灌漑施設の工事、この水の権利に関する話し合いなども想定できます。

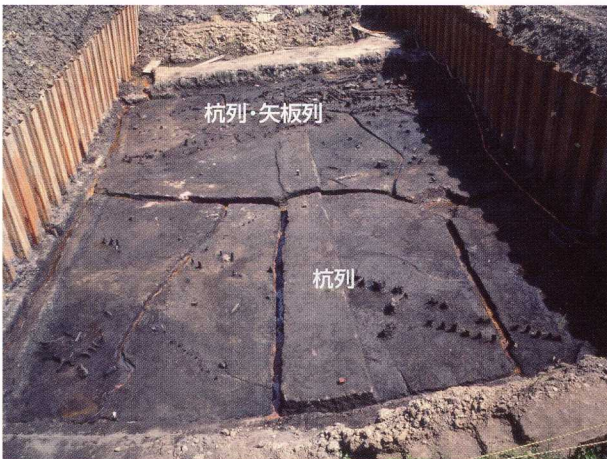
さらに農作業のほかに、住まいである竪穴住居の建築、集落の貯蔵施設としての倉庫建築、各種道具

の製作など生活の様々な場面で、共同作業が生じます。

このような諸々の作業、工事などの場面で、多くの人々が協力し合う必要が生じ、このような共同作業の中で、人々は各々の「つながり」を確認したことでしょう。



▲ 国分地区で見つかった農具や工具類
これらの道具を使い、稲の刈り取りや土木作業をしていたと考えられます。



▲ 菜畑遺跡の水田跡 (佐賀県唐津市)

たくさんの方が協力して、杭や矢板を打って田んぼを整備していたと考えられます。(唐津市教育委員会提供)

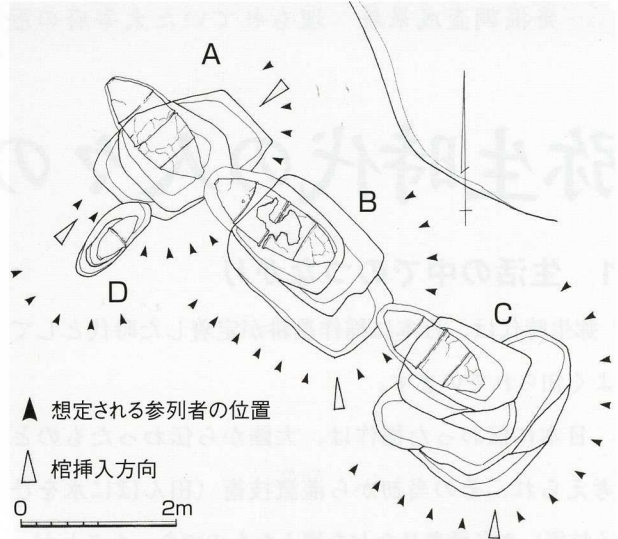


▲ 前田遺跡の竪穴住居 (向佐野地区)

地面に穴を掘り、その上に覆いをかける住居です。皆で穴を掘り、覆いに使う材木などを採ってきたと考えられます。



▲国分松本遺跡で見つかった甕棺墓(右図のCの棺)



▲ 復原される葬儀の場と甕棺墓に見るつながり

甕棺を掘るための階段の位置や、甕棺の見える位置などから葬儀参加者の位置を推定復原したのが上の図になります。

大型の棺(A~C)がそれぞれつながるようになっています。また、小型の棺(D)は大型の棺(A)に寄り添うように埋められていました。

2 葬送の場でのつながり

一方、死者の葬儀についてはどうだったでしょうか。

死者が出ると、死者を葬るためのお棺（甕棺）がつくられ、そのお棺を埋めるための大きな穴を掘ったりする諸作業が考えられます。また葬儀の場においても、死者と「つながり」のあった人々が参加することが想定でき、調査からもある程度葬儀の場が復原できます。さらに寄り添うような墓のあり方から、死者同士の「つながり」を意識するようにつくられていることを感じさせます。

以上のような日常生活の様々な場面において、共同作業が行われ、役割分担（分業）の中での人々の「つながり」、一方死者との葬儀をとおしての「つながり」、死者埋葬にあたっての死者同士の「つながり」など、多くの場面において集落の中の人々が「つながり」を確認できた時代であったといえます。



▲ 太宰府市内で見つかった甕棺

コラム 弥生時代の「家族」

家族といえば、現代の両親と子供からなる核家族をイメージしますが、弥生時代の「家族」とはどのようなものとして捉えられているのでしょうか。

遺跡の中から過去の人々の家族構成を考えることは大変難しく、古文書や国の内外の民族（民俗）事例から推定を行うこととなります。現在考えられている弥生時代の「家族」像は、生業とくに稲作農耕を行う上で必要となる人々の集まりを「家族」とする捉え方があります。このように考えると、単に血のつながった人々だけではなく、農作業に従事する複数の家族の集まりであったと考えられています。

(太宰府市教育委員会文化財課 中島恒次郎・城戸康利・渡邊仁)

平成16年6月26日発行 太宰府市教育委員会文化財課編集 〒818-0132 福岡県太宰府市国分4-9-1 TEL 092-924-8533

※「逢知の葉」には、文化ふれあい館に集う人々が歴史や文化に触れ、様々な知的めぐり逢いがあるようにという願いが込められています。

インターネット情報 <http://dazaifu.mma.co.jp>